

インドの貿易と貿易政策（一）

イギリス東インド会社と

マンの重商主義学説

川 田 俊 昭

研究課題名 インドの貿易と貿易政策

研究の目的 種々ある「商業政策」の取扱い方の一つに、「貿易理論」を商業政策の原理的基礎として取扱う方法がある。又今日、商業政策という場合、貿易論と密接不可分離に結びついた斯かる方法に基づくもの、いわば対外商業政策——貿易政策としての商業政策(論)がその殆んど といつて差支えない。——歴史的・原理的事由に拠る。本研究は斯かる方法的視点から、インド人学者によるインド貿易論、及びインド貿易政策(商業政策)論を検証する。拙稿——

商業政策の基礎（一） 輸出成長率を決定する最も重要な原理 経営と経済 第87号

同 （二） 商業政策学の系譜

同 第90号

の一層の発展を目指すものといつてよい。

研究の概要 先づ、インド貿易政策の現実的基礎をなすところの貿易事情——インド貿易の発展、他国との貿易関係、その多角的構成、インドの貿易組織、平価切下げの事情、その他——を「貿易差額」の問題（いうまでもなくこれが貿易論の中心課題である）を中心に、その消長、その性格、その特質、等——解題、概観する。世界貿易（又は世界経済）という一般の形態の一特殊化としてのインド貿易（インド経済）の把握——と共に、貿易政策の経済的効果を窺うに足るインド貿易という一つの政策の場の解明が、本研究にとっては、最も重要なものとして先づ要請されるからである。

次に、如上の如き貿易事情下に行われた、乃至は行われる筈の、インドの貿易政策（商業政策）をその主要なもの、本質的なもの、固有なもの——について随次考察する。即ち、輸入政策、輸出政策、又は短期政策、長期政策、或は関税政策……等、種々なる様態がクローズ・アップされる筈である。しかしこの場合にも、本研究にとって重要なのは、インドの貿易政策が「商業政策学の系譜」上、いかなる規定と性格を獲ち得るか、政策原理一般上、いかなるカテゴリーに所属するものとして取扱われるべきか——という方法（論）的問題である。一貫した政策原理に基づいてこそ、種々様々なる諸施策が統一的に整序され、その経済的効果も一層明確に確認される所似であるから。

主要参考文献は Varshney, Roshan Lal, India's Foreign Trade, During and After the Second World War, 1954 である。

序 章

I

Varshney, Roshan Lal によれば、1939年に至るインド貿易の発展は、研究の便宜上、次の七つの時期に分かたれる。(Varshney, R. L., *India's Foreign Trade, During and After the Second World War*, 1954, p.1) 即ち——

- (1) Ancient and Hindu Period
- (2) Muslim and the Mughal Period
- (3) Early European Period up to First War of Indian Independence
- (4) 1858—1900
- (5) 1900—1914
- (6) 1914—1918
- (7) the Inter-War Period

然して、その第三の期間こそ “European East India Companies and India's Foreign Trade” の期間として特色づけられる。換言すれば、インド貿易の事実上の主人公が、この国の住民でなく、ヨーロッパ人、就中イギリス人であったこと、インド貿易が「東インド会社」、就中イギリス東インド会社の独占の手中に帰した——「1757年後、インドの貿易は事実上イギリス東インド会社の独占に帰した」(Varshney, op. cit., p.5) こと、極言すれば、イギリス東インド会社即インドの貿易であったことによる。

斯かる事情から、当時、イギリス東インド会社の名称そのものによって象徴せられるイギリスの貿易と貿易政策が、その実、“インドの貿易と貿易政策”として概念さるべきこと蓋し当然というべきであろう。しかも、イギリス(ヨーロッパ諸国)のインド(東インド——東南アジア又はアジア諸国一般)^(註)に対する意識的措置——政治的、経済的、軍事的諸要素を含む、乃至それに関わる思想一般が、「重商主義」、乃至「商業主義」として、商業政策——貿易政策、惹いては経済政策 (political economy——経済学) 一般の始源的意味を有していること、しかも経済に関わる制度——一国の法、権力によって認められた行為という意味で——として、対内的、対外的に、近世最初のものであること——衆知の如くである。本篇を「インドの貿易と貿易政策」中の主要な、且つ特徴あるテーマの一つとした所以である。

(註) 「スミスは……東インドをもって、中国、日本をも含めた広大な地域として理解し、他方、ノールズ (Knowles, L. C., *The Economic Development of the British Overseas Empire*) も、香料諸島、マレー、インド、ペルシャ及びフィリッピンをさえ含めて、東インドと称した、と述べている。」(西村孝夫、イギリス東インド会社史論、大阪府立大学経済研究叢書、昭和35年、3頁)

II

一国の権利 (sovereign power) が、軍事的、経済的、その他諸手段をもって、他国のそれに大きく介入 (penetrate into) する時、後者の国は所謂 colonize される。イギリスのインドへの介入 (侵略、支配) ——「1757年 Plassey の戦によって、イギリスは Bengal に主権を打ち樹てた。斯くて多くの trader [イギリス東インド会社の] が同時に ruler [インドの] になった。」(Varshney, op. cit., p.5) 約言すれば——「1757年 に英国東インド会社は Bengal の征服をはじめたが、インドはこの時英国の植民地になった」(大阪市立大学経済研究所、中国とインドの経済発展、昭和32年、213頁) のである。「Bengal は、インドにおけるイギリス支配を、第一に充分に経験した。その支配は、公然たる掠奪と、生きている耕作者ばかりでなく死んでしまった 耕作者からさえ最後の一銭にいたるまで搾り上げた地稅制度をもって発足した。」(Nehru, J., The Discovery of India, 1946, A Doubleday Anchor Bk. ed., p.208. 訳407頁)

搾取、掠奪——所謂「Bengal における掠奪」(plunder of Bengal) が、イギリス本国自体にとって、いかなる歴史的的重大意義を有していたか。——「産業革命」(1770~1830) がそれである。アメリカ人、アダムズ (Adams, Brooke) は語っている、「Plassey の戦の直後、Bengalの掠奪品はロンドンに到着し始め、然してその効果は殆んど即時にあらわれたものの如くである。何故ならば、あらゆる権威者が、『産業革命』は1770年をもってはじまった、ということに意見を同じうしているからである。……Plassey の戦は1757年であった。それに引続いて起った変化程急速だったものは、おそらくどこを探しても未だ嘗て無いだろう。1760年には飛梭 (flying shuttle) があらわれた。そして製鍊において石炭が木炭に代りはじめた。1764年にはハーグリーヴズが多軸紡績機 (spinning jenny) を発明し、1776年にはクロンプトンが走錘精紡機 (mule) を案出し、1785年にはカートライトが力織機 (power loom) の特許をとった。又1768年にはワットが蒸氣機関を完成した。……しかしそれらの機械類は、時代の加速度的な動きにとって捌け口の役はしたけれども、それらがこの加速度をひきおこしたのではない。発明はそれ自体では受身のものであって……それが活用されるに充分な力のたくわえが蓄積されるのを待っている。そうしたたくわえは、つねに金銭、それも退蔵されたものではなく、動いている金銭の形をとらなければならぬ。インドの財宝の流入と、それに続いて起った信用の拡大がみられる前には、こうした目的のために充分な力はなんら存在していなかった。……おそらくは世界はじまって以来、いかなる投資といえども、インドの掠奪から獲られた程の利潤を生み出したものは未だ嘗てない。何故なら、殆んど五十年近くの間、英帝国には誰も競争相手はなかったのだからである。」(Adams, B., The Law of Civilization and Decay, 1928, pp.259-60, quoted by Nehru, op. cit., pp.209-10)

無論、インドの植民地化を企図した国は、ヨーロッパ諸國中、一人イギリスに尽きたわ

けではない。先づ——「1498年、喜望峰の発見後、ポルトガル人がアラブ人に代ってインド貿易の主人公となった。と同時に、他のヨーロッパ諸国〔スペイン、オランダ、フランス、そしてイギリス〕もポルトガルに続き、東邦貿易による莫大な利益を獲得した。斯くて、インド貿易の分野にヨーロッパ人が到来し、又彼等に Mughal 皇帝が特許を与えたことにより、インド人の持分はひどく減少し、遂には彼等はそれを失う破目に陥った。他方、ヨーロッパ諸国は利益を求めてお互い戦ったが、〔所謂、世界商業戦〕結局、イギリス東インド会社が、貴重な特許——1608年及び1634年 Mughal 皇帝から得た——のお蔭で、生き残ることになったのである。」(Varshney, op. cit., p.5) 斯くてイギリス東インド会社は文字通りインドにおける特許会社(独占)となった。——「1757年後インドの貿易は、事実上、イギリス東インド会社の独占(monopoly)となった。」

いわば、イギリスはヨーロッパ諸国中の成功者であった——英・仏間の東インド争奪戦・Plassey の戦はその最後の仕上げであった——わけである。「然して、彼等がそこで一世紀半に亘って独裁権力を振ってきたあげくのインドの現状〔泥と汚れの河床——タゴール〕こそ、彼等の成功の尺度である。」(Nehru, op. cit., p.214, 訳413頁)

植民地インドより、「イギリス東インド会社は、本国の産業に原料を供給し、且つ海運を盛大ならしめることによって、極めて有用にして愛国的なる機関たるの実を示した。」(Varshney, op. cit., p.5) ——「イギリスは工業生産力の点でフランスを圧倒……海運力ではオランダを制圧した。」(入江節次郎、独占資本イギリスへの道、昭和37年、2頁) 然して、このことは、同時に、インドの経済的主体(政治的、軍事的主体)がインド人でなくイギリス人になったこと、「東邦の穀倉」——“resposity of gold” インドが country of hungry millions ——「英帝国の王冠の最も輝かしき宝石」になったこと——を意味する。

インド固有の産業(殊に綿工業)——それが手工業生産を中心とした幼稚なものであったにせよ、当時、^(註) 繁栄していたといわれる——「インドの工業……国内生産は一途、衰微の跡を辿った。」(Varshney, op. cit., p.5) 現インド首相にして、『インドの発見』の著者、Nehru, Jawaharlal は当時を評して、「古い手工業的生産が新しい工業技術と競争させられたわけであるから、或程度までは(インド工業の衰退は)不可避的なことであった。しかしそれが政治的及び経済的な圧迫によって促進されたのであり、しかもインドに新しい技術を応用しようとする試みは何らなされなかったのである。それどころかこれを妨げる様あらゆる手が打たれたという有様で、その結果インドの経済的發展は阻止され、新しい工業の成長は妨げられてしまった。機械類をインドに輸入することは許されなかった。インドには真空状態が作り出されて、只イギリス商品のみがそれを満すことが出来たのであった。それは又失業と貧困の急速な増大を惹起した。……それまで工業や手工業に従事していたこれら数千万の人々は今や何をしたらよいのだろうか。……勿論、彼等も死ぬことは出来た。堪え難い状態から逃避するあの道ならいつでも開いている。事実、何千万もの人達は死んだ。イギリス人のインド総督ベンティンク卿(Lord Bentinck)は、1834年に

『惨状は商業史上これに比すべきものは見出し難い。綿織工の骨によって、インドの諸平野は白色を呈しつつある』と報告している。」(Nehru, op. cit., p.211, 訳410—1頁。村上兵衛, 大東亜戦争私観, 中央公論, 昭和38年3月号, 参照)

(註) 「アンステイ (Anstey, V.) は、十八世紀に至るまでは、『生産様式及び工業、商業組織におけるインドの方法は、世界中の他の何れの部分に行われているものとくらべても、ひけをとらないものであった』と書いている。——インドは高度に発達した手工業国であって、その手工業製品をヨーロッパや、その他の国々に輸出していた。……インドは、工業的にも、商業的にも、又金融的にも、産業革命以前のどこの国にも劣らぬ進歩した国であったのである。」

(Nehru, op. cit., p.192, 訳388頁)

(註) 斯かるインドの悲慘——植民地インド (殊に東インド) の存在, 「二百万平方マイルに達するインドの搾取」が, 植民地アメリカ, 所謂「西インド」の存在と相俟って, ——それらの代償として, イギリス乃至イギリスを中軸とするヨーロッパ諸国に及ぼした決定的, 歴史的な影響, 意義とは——「アメリカの発見及び喜望峰迂回の東インド航路の発見は, 人類の歴史の上で, 最大にして, 且つ最も重要な二つの事件であった……この発見の結果として, ヨーロッパの商業諸都市は, 世界の僅か極小部分のための製造業者や仲立商人たることをやめて, 今や, アメリカの夥しく, 且つ豊かな開拓者達のための製造業者となり, アジア, アフリカ, アメリカの諸国民の殆どすべてのための仲立商人, 或点では, 製造業者ともなるに至った。ヨーロッパの産業に対して二つの新世界が開かれるに至ったのであるが, それらの一つ一つが何れも旧世界よりもはるかに巨大であり, 且つ広潤なものであった。」(スミス『国富論』) マルクス・エンゲルス『共産党宣言』の簡にして要を得た筆致を借りればこうである, 「アメリカの発見, アフリカの廻航は, 勃興しつつあったブルジョア階級に新しい領域をつくり出した。東インドと支那の市場, アメリカへの植民, 諸植民地との貿易, 交換手段や商品の一般的増大は, 商業, 航海, 工業に, 嘗って知られなかった様な飛躍をもたらし, それと共に, 崩壊しゆく封建社会内の革命的要素に急激な発展 (rasche Entwicklung) をもたらした。」即ち, 「産業革命」——イギリスをしてヨーロッパの覇権を制せしめた——これである。換言すれば, 西インドと東インドとの「二つの貿易」が, ヨーロッパ, 特にイギリス資本主義の確立に不可欠な歴史的條件だったのである。が, 植民地アメリカは逸早く本国から独立した。よって, 以上更に修正, 要約, 換言すれば「インド人三億の市場を制御せることこそ, イギリスの工業を刺激し, 十九世紀初頭に於て他のあらゆる競争者に打ち克たしめ得たのである。」然して, この東インド, 即ちインド貿易の立役者こそ, 他ならぬイギリス東インド会社であった。

(註) 「イギリスの侵入こそ, 手織機を破壊し, 紡織機を粉砕した張本人である。先づ, イギリスはヨーロッパ市場からインド製木綿製品を駆逐し始めた。これに加えて, 東インドに撚糸をもたらした, 木綿本来の母国を木綿産地に陥れた。1818年から1835年に至り, 撚糸のイギリスからインドへの輸出は, 一に対する五千二百の割合で激増した。1824年, イギリスの対インドモス

リン輸出は、百万ヤードだったのが、1847年には、六千四百万ヤードの高額を突発した。同時に Dacca 市の人口十五万人は二万人に減退した。……イギリスの蒸気力とその科学は、東インド地方において、全く農業と工業との結合を破砕した。」(Marx, The British Rule in India, 1853)

(註)
インド(民族)の悲惨、イギリス——ブルジョアの非情、「ブルジョア階級……彼等は産業の足もとからその民族的な土台を切り崩した。長年の歴史をもった民族的な産業は破壊されてしまい、……これを押しのけるものは新しい産業であり、その採用はすべての文明国民の死活問題となる。しかも、それは最早国内の原料ではなく、最も遠く離れた地帯に産出される原料を加工する産業であり、然して又、その産業の製品は、国内自身において消費されるばかりでなく、同時にあらゆる大陸においても消費されるのである。……ブルジョア階級は、生産用具の急速な改良によって、無限に簡単になった交通によって、すべての民族を、最も未開な諸民族をも文明の中に引き入れる。彼等の商品の低廉な価格は重砲隊であり、これを打ち出せば万里の長城も破壊され、未開人の頑固極まる異国人嫌いも降伏を余儀なくされるのである。」(Marx-Engels, Manifest der Kommunistischen Partei)

(註) “食物史観”よりすれば、インドの植民地化は澱粉の所以となる、「従来、この種の食物は気質を和らげる、勇気をさえ軟化する、といわれている。……インド人、彼等は殆んど米ばかりで生活しているので、彼等を奴隷化しようと欲した誰にでもおとなしく従った。」(ブリア・サヴァラン『美味礼賛』)——インドに無責任なヨーロッパ人の考えそうなことである。

斯くして、“ブルジョア”としてのイギリス——「イギリスはインドに於て果すべき二重の使命をもっている。一つは、破壊的使命、二つには、創造的使命——である。一面、旧来のアジア的社会秩序の破壊、他面、アジアにおけるヨーロッパの社会秩序の物質的前提の創設——である。……斯くて、イギリス人は、インド国内の共同団体制度を破壊し、国特有の工業を根こそぎにし、土着の社会に於て偉大にして尊貴なるものをすべてを平凡化して、全 Hindu 文化を粉碎し去ったのである。インドにおけるイギリス人の歴史は、破壊のほか何等の術をしていない。……広さにおいてヨーロッパと比敵し、一億五千エーカーを抱擁する一大国土——インドに対するイギリス工業の破壊作用は明々白々であり、真に驚異に価する。しかしながら、吾々の忘れてならないのは、その破壊作用は、単に、当時採用された全生産組織、生産様式の系統的結末を物語るに過ぎないことである。この生産は資本の無制限の支配を基礎とする。資本の集中は、独立不覇の権力たる資本の存在にとって、根本的重要性をもっている。この資本集中が、世界の諸市場に及ぼしているところの破壊的作用は、現今、文明世界の各都市でその作用を表しているところの経済学上の内在的自然法則〔所謂「近代社会の経済的運動法則」〕を大規模に暴露しているものである。」(Marx, The Future Results of British Rule in India, 1853)

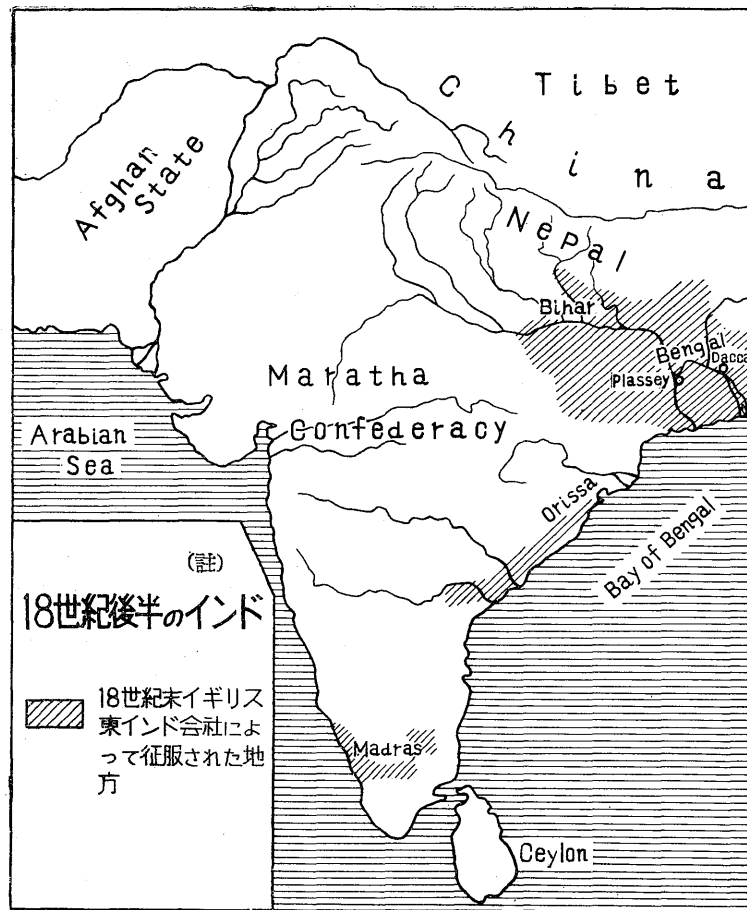
Nehru ——先の引用における Nehru —— が呪うべきは、イギリス、又はイギリス東

インド会社というよりは、「資本主義」なる“妖怪” (Gepens) それ自体であったのかもしれない。——「資本制生産様式及びこれに照応する生産並びに交易諸関係……それらの行われている典型的な場所……はイギリスである。」(Marx, Das Kapital, Vorwort zu ersten Aufl.) とあれ、吾々は些かのイデオロギーの偏見もなく、次の様にいうことが出来るよう、「資本主義的英帝国主義はインドの搾取の上に打ち建てられたものである」と。

斯くて Varshney の所謂第三の期間——「この期間、二つの傾向の作用していることが見出される。即ち一方、(I) インドにおける外国(イギリス)による支配の増大であり、他方、(II) 外国における産業革命である。……産業革命によって刺激され勃興しつつあるイギリス本国の諸産業に供給すべく、インドからの原材料及び食用穀類の輸出は、助長、奨励され、運輸、通信の改善はこの傾向を促進するに力あった。あらゆる特別な取計いは、交易用生産物の生産と輸出を助長するためのものであり、農業は(インド原住民が) 生きるための農業より、麻、綿、茶等(イギリス人が) 儲けるための農業へとその性格を変えていった。たしかにインドの貿易量は増大した。『しかし、インドの貿易は極めて異状(unnatural) な仕方で助長された。その成長乃至発展は、この国の経済的福祉の手段というよりむしろ目的としての取扱いを受けた。』(貿易はそれ自体目的というより、目的への一手段である。) いわば(この期間における) インド貿易の発展はイギリスにおける産業革命の必然的なプレリュードだったのである。」(Varshney, op. cit., pp.5-6)

英・印間の関係についても、一国における善き条件(富裕)は他国における悪しき条件(貧困)を文字通り条件としていたのである。^(註)——斯かる基本的歴史事情は、1947年、インドがイギリスの支配を脱し独立——それとて、分裂主義的独立ではあるが——を得るまで、二百年の長きにわたり、インドの社会経済生活一般を特徴づけて来た。「事実、イギリス支配の時期の長さや貧困の程度のひどさとの密接な関連を示す或種の図表の如きものを、描くことが出来るだろう。少数の大都市や若干の新しい工業地域のあることは、この観測に何ら本質的な違いを生ぜしめない。注目し値するのは全体として見た大衆の状態であって、インドの最も貧困な地方が、Bengal, Bihar, Orissa 及び、Madras 州内の諸地域であることに疑問の余地はあり得ない。…… Bengal はイギリス人のやって来る前までは、たしかに極めて富裕な繁栄した地方であった。こうした対象や差異には多くの理由があり得るであろう。しかし、嘗てはあれほど豊かで栄えていた Bengal が、……百八十七年にわたるイギリスの支配の後、今日貧困に打ちのめされ餓えて死にひんしている人々の惨めな大集団の居るところだという事実は、見のがし難いのである。」(Nehru, op. cit., p.208, 訳407頁)

(註)「この一切の結果は、その初期の段階において、既に1770年の飢饉となって現れ、Bengal 及び Bihar の総人口の三分の一以上が、このため掃滅されてしまった。しかし、それもすべて進歩のためにこそであった。けだし Bengal は、イギリスにおける産業革命を生み出すことに大いに助力したという事実を誇りとしていゝわけである。」(Nehru, op. cit., p.209, 訳408頁)



(註) Mukherjee, R., *The Rise and Fall of the East India Company*, rev. ed., 1958, p.253.

あれもこれも、二百年間インドに『南北戦争』——植民地アメリカ＝南部と独立国アメリカ＝北部との戦（所謂「独立戦争」以上に歴史的的重大意義を有している——と私は考える）がなかったが故に！ Nehru も書いている。「アメリカ合衆国の独立は、インドの自由の喪失とまず同時代の出来事であった。過ぎ去った一世紀半の年月を顧みて、インド人はこの同じ時期に合衆国によってなされた長足の進歩を些か物欲しげな憧れの面持で眺め、それを自分の国でなし遂げられたこと、なされなかったことと比較してみる。……吾々が古来の思い出と伝統でぎゅう詰にされていたということも勿論真実である。しかしそれでも、もしイギリスがインドにおける大きな重荷をひきうけてイギリス自ら吾々に言って聞かせる様に、吾々が余りにも知らずにいた自治の難しい技術を、吾々にこうまで長い間にわたって教えるとうと努力するという結構な真似をしてくれなかったら、インドは単にもっと自由であり、もっと繁栄していたばかりでなく、科学、芸術及び生命を生きるに値するものたらしめるあらゆるものにおいて、もっともっと進んでいはいはしなかったらうかということ

は、あながち考えられないことではないのである。」(Nehru, op. cit., p.197, 訳393—4頁)

しかし、このことは必ずしもアメリカに比してのインドの不幸——「生命を生きるに価値するものたらしめる」就中道義上の——を意味しない。『幸福なるかな、悲しむ者。』『ブルジョア階級になること』の意義^(註)については、南北戦争前後における北部アメリカ(ヤンキー)本来の企図の実現——アメリカの西漸運動——世界史上最大の汚点の一つ、ジョン・ブルの残虐に劣らないそれ、インディアン虐殺(=産業革命)——イギリス人によるインド人 Indian 虐殺と対照的な——を想起すべきである。彼等による Indian 虐殺、無論それは(例えば)“Bataan死の行進”——彼等が一方向的にくちをきわめて非難する——『何ゆえ兄弟の目にある塵を見て、おのが目にある梁木を認めぬか』——の如き到底その比ではない。“鬼畜米英”というべきか!「キリスト教的植民制度^{さいはひ}について、キリスト教を専門とするウィリアム・ハウイト(Howitt, William)なる人はいう、『所謂キリスト教徒の人種が、世界のあらゆる地方で振舞った、又彼等の抑圧し得たすべての人民に加えた野蛮行為と無鉄砲な残虐行為とは、世界史の何れの時代においても、又何れの人種のもとにあって——それが如何に未開で無教養であり、如何に無情で無恥であっても——その比を見ない』と。」(Marx, Das Kapital, Dietz Verlag, S.791, 長谷部訳1644頁)

(註)「産業資本家以前の経済から資本家的なインダストリアリズムの経済への推移は、人民大衆に課せられる多大の困難と人間的苦悩の重い犠牲とを含んでいる。……イギリスにおいてもこうした困難はあったけれども、転換は迅速に行われ、結果としてあらわれた失業は間もなく新しい工業によって吸収されたために、全体としてみると、困難はそれほど重大ではなかった。しかしそれだからといって、人間的苦悩の犠牲が払われなかったという意味ではない。勿論それは支払われたのであり、しかも存分に他のものたち、特にインドの民衆によって、飢饉と死と広汎な失業とによって、支払われたのである。」(Nehru, op. cit., p.213, 訳413頁)「もし貨幣が、オジェのいう如く『頬に自然的な血痕をつけてこの世に生れる』とすれば、資本は、頭から爪先に至るまであらゆる毛孔から血と汚物とを滴しつゝこの世に生れるのである。」(Marx, Das Kapital, SS.800—1, 訳1660頁)

III

「ヨーロッパ人は、インドの貿易に、大きな作用を及ぼした。彼等は主としてインドの織物に魅惑され、従って、イギリス東インド会社は織物の貿易に専念し始めた。彼等はその生産をも独占し、インドにおける最上の品質の織物を輸出し、従って、インドの貿易も増大した。しかし、ために、ランカシャーの産業は大きな打撃を受け、イギリス東インド会社はその policy を変更すべく余儀なくされた。インドの織物は、国内において消費されぬ様、輸入関税をいやましに増加され、1720年、インド綿布の使用は禁止され、インドの輸出は多大の被害を受けた。これはフランス革命——大陸の需要の減少を結果せしめた——と機を一にしている。輸出市場は麻痺し、インド工業に悪影響を及ぼした。国内市場

も又、輸出奨励金つきの輸出品で市場が汙濫し、国内市場向産業さえその地位を奪われるに至った。工業製品の輸出の下落によって生じた輸出の空白を埋めるために、然して又、産業革命によって刺激されたイギリス本国の興隆しつゝある諸産業を養うために、インドの原材料と食用穀類の輸出が増進せられた。……」(Varshney, op. cit., p.6)

——とインド人学者 Varshney は書いている。——穏当に書いている。しかし事實は極めて深刻、酷薄なものであった。同一人種による、同一事態についての、同一説明も Nehru の筆を借りれば、こうである——

「東インド会社の初期における主な業務、同社発足の本来の目的は、インドの工業製品——織物類その他の品々とか、香辛料といったようなものを、東邦から、これらの品物に対して大きな需要のあったヨーロッパへ、運ぶことであった。イギリスにおける工業技術の発展と共に、そこに新しい工業資本家 (industrial capitalist) 階級が勃興し、彼等はこの policy の変更を要求した。イギリス市場はインド製品に対して閉鎖さるべきであり、インド市場はイギリスの製造工業に対して開放さるべきであった。イギリス議会は、この新しい階級に影響されて、インド及び東インド会社の活動に対して一層大きな関心^(註)をもちはじめた。まず手はじめに、インド商品が法令によってイギリスから締め出された。東インド会社がインドの輸出業務を独占していたので、この締め出しは他の外国市場にも影響した。これに続いて、様々の手段と国内関税——それはインド製品の流れを国内自体において阻止した——をもってインドの製造工業を制限し、粉碎しようとする企図が強行された。一方、イギリス製品が入ってくるのは自由であった。インドの織物工業は破滅し、窮しい職工や職人達がそのまきぞえを喰った。この過程は Bengal 及び Bihar では急激であったが、他の地方では、徐々に、イギリス支配の拡大と鉄道の敷設に伴って、ひろがっていった。……インドに真空状態が作り出され、ただイギリス商品のみがそれを充すことが出来た。それは又、失業と貧困の急速な増大を惹起した。インドはイギリスの工業製品のために原料を提供し且つ市場を提供する工業国イギリスの農業植民地と化し、こゝに、近代植民地経済の古典的な型が打ち樹てられたのである。」(Nehru, op. cit., pp.210, 訳 410—1頁)

(註) 「ウィリアム三世の法律第十一号、第十二号第十章によって、インド並に支那からの加工された絹布、型つき又は染色された更紗の着用が禁止さるゝ旨が規定された。斯くの如き商品を所持し又は売却した者は、すべて英貨二百ポンドの高額の罰金に処せられる。同種の法律は、後に至っては『啓蒙されたイギリス製造業者』の数次の愁訴によって、ジョージ一世、二世、三世の時に発布された。この時代の大半を通じて、インドの製造品は普通ヨーロッパに卸す目的でイギリスに輸出され、イギリスの市場自体からは全く排除されていた。」(Marx, The East India Company, its History and Results, 1853)

或は、人あって、これら両者の強調の相違を、単に科学者と政治家 (哲学者) の相違——と一蹴するかもしれない。——可能なことである。しかし Nehru のそれを、単なる激奮、

(註)
イデオロギー乃至政治的実践のためよりの叙述となすには、余りにも事実の支配が強く、且つ、論理が強力である。

(註)「植民地に関する経済学的所論は、異なる人が夫々頭に描いていた実践の如何に応じて、全く異なる方向に沿って走っており、また何の矛盾も含まないで、夫々全く異なる結論に導いてゆくであろう。ワーレン・ヘスティングス (Hastings, Warren) のなしたところ——即ち無恥の盗賊行為——も一例である。ウィリアム・ベンティンク (Bentinck, William) のなしたところ——即ち、博愛的な行政——も他の一例である。」(Schumpeter, History of Economic Analysis, p.339, 訳714頁)

然して、それは——前節の考慮をも加えるならば——次の如き単簡乍ら、甚だ興味ある事実、方法を如実に示して余りある。

(1) 東インド会社の基本的性格が、尠くとも、所謂 policy を媒介とすることによって、「商業資本」より「産業資本」(工業資本industrielles Kapital)に移行していること、換言すれば、産業資本が東インド会社の主要性格であるといふ得る。マルクスも指摘せる如く——「東インド会社に対する議会の進出干渉は、商業界からよりも、十七世紀の末、並びに十八世紀の大半に亘り、工業界から要望されたのである。」(Marx, op. cit.) それは最早、マルキストの所謂「表面をかすめて通る」前期的商業資本でなく、むしろ「個別的諸経済の内部構造を破壊し、その中に自らの製品を打ち込んでいこうとする産業資本」(西村, 前掲著, 3頁)——ブルジョアジイ(工業資本家階級)そのものなのである。「ブルジョア階級……彼等の商品の低廉な価格は重砲隊であり、これを打ち出せば万里の長城も破壊され、未開人の頑固きわまる異国人嫌いも降伏を余儀なくされる。……一言でいえば、ブルジョア階級は、彼等自身の姿に型どって、世界を創造するのである。」(Marx-Engels, Manifest.)

(2) 同様に又、斯かる東インド会社(=重商主義政策)の果した主なる(歴史的)機能が、マルキスト乃至大凡の通説或は教条におけるが如く——「イギリス資本主義の所謂原始的蓄積期において……巨大な貨幣財産を集積したこと、又イギリス商品(綿製品)の市場たるインドを、イギリス産業資本のために用意したこと」(西村, 前掲著, 4頁)——確かに初期 die beginnende Eroberung und Ausplünderung von Ostindien(Marx, Das Kapital, (註1)

S.790)については、(前述の)アダムズ同様、吾々も斯かる仮設の意義を或程度看過し難いかもしれぬ、が(全体としては無視し得る)——に尽きるのではなく、むしろ産業資本家階級——Nehruの所謂 class of industrial capitalist——マルクスの「ブルジョア階級」——そのものによる policy であったこと、換言すれば、事態は既に資本主義そのもの——「資本制蓄積」の渦中にあったこと——が当然唱導され得る。東インド会社が「貨幣財産を集積したこと」——それは、資本主義の原因というより、むしろ結果なのである。——「本源的蓄積……即ち資本制生産様式の結果ではなくして、その出発点たる蓄積」(Marx, Das Kapital, S.751, 訳1568頁)それは資本家階級(ブルジョア階級)の存在のデモンストレーションそのものなのである。「ブルジョア階級の存在と支配にとって最も本

質的な条件は、私人の手中への富の集積、即ち資本の形成と増殖である。」(Marx-Engels, Manifest.) —すべての「富……を増進することが、その国の工業及び商業の大目的である。」(Smith, The Wealth of Nations, Mod. Lib., ed., p.418, 大内訳, 第3分冊, 43頁)

(註1) 「およそ産業資本……にとって、少くとも或程度の『貨幣』の集積が不可欠の前提条件であることは、改めて論ずるまでもない程、自明であろう。……しかしながら、この『貨幣』の集積(従って『資金』の豊富な存在)さえも、通例の見解に反して、到底……決定的条件とはなしがたいのである。実際、歴史上、『貨幣』の集積は多かれ少かれ何れの国又何れの時代においても常に見出されるところの事態であるばかりでなく、更に『資金』の豊富な存在が必ずしも……工業生産力の発達を惹起することなく、かえって逆に、封建的な農奴制度を強化し、又その再編成を促進する事実さえ、屢々見出されるからである。」(大塚久雄, 近代欧州経済史序説, 改訂版, 昭和26年, 152頁)

(註2) 「資本の蓄積は剰余価値を前提とし (setzt die Akkumulation des Kapitals den Mehrwert……voraus), 剰余価値は資本制生産を前提とし, 資本制生産は 又商品生産者達の手における比較的多量の資本及び労働力の現存を前提とする。……循環論法……それから遁れ出るためには、吾々は資本制蓄積に先行する一つの『本源的』蓄積(アダム・スミスのいう『先行的蓄積』)を……想定 (unterstellen) するほかはない」——とマルクスは言う。果してそうであるか。ともあれ、「本源的蓄積」なる概念は、それが飽迄一つの「想定」乃至仮設(一つには説明の便宜上)としてある限り、通常そうである如く——何も決して無暗に有難がる筋合のもの、それをトーテムの如く拝すべきいわれのものではない。況んや、それによって吾々の信仰のあつさ、又は頭の固さ——石頭を誇るべきいわれのものでもない。可能ならそれを無視しても差支えないのである。或は又、他の工夫をもってこれに代らしめることさえ可能である。かゝる可能性として一応四つ挙げられよう。先づ——

① 「本源的蓄積」に代えるに、「貯蓄」なる仮設が可能である。「殊に the initial stages of capitalism and of every individual industrial career においてそうである。貯蓄は古典派経済学で説明した程ではないにしても、その過程の重要な原因であったし、現に今でもそうである。……蓄積は利潤を先行条件とする (accumulation……presupposes profits) ——これが事実蓄積と貯蓄を区別するための正当な根拠である。」(Schumpeter, Capitalism, Socialism and Democracy, p.16, 訳26頁)

② しかも、僅かの貯蓄でさしつかえない。「文字通りの意味での『貯め込み』も、特に資本主義の初期には『本源的蓄積』の一つの重要な方法であった。」(Schumpeter, op. cit., p.16, 訳27頁)

③ 殆んど無視し得る程——極く僅かの貯蓄でも……。 「十七、八世紀の工場の多くは、人力で建てられ得るものであり、しかもそれを運転するのに、極めて簡単な設備しか要らない小屋の様なものであった。この様な場合には、先見ある資本家の肉体労働と、極く僅か (quite small) の貯蓄基金があれば充分であった——それに知能が加わらねばならぬことは勿論である。」(Schumpeter, op. cit.)

④ 結局——貯蓄も、従って又「本源的蓄積」も無視すること——本稿の場合である。

(註3) 斯かる本稿の新(珍?)解釈は、重商主義自体についてののみならず、重商主義以前——例えば東インド会社乃至重商主義発生の根本契機・アメリカの発見及び喜望峯迂回の東インド航路の発見——についてさえ、その適用が可能である、という。即ち、これら所謂「地理上の発見」——「発見の動機として通例あげられることは、仲介商業及び黄金狩(Jagd nach Gold)の対象としての東インドの魅力である。このことは多かれ少かれ承認せねばならぬであろう。しかしながら、これと並んで工業生産物の販路拡張の欲求も又その一契機をなしていた事の推測も可能である……例えば発見の前段階を形づくるアフリカ西海岸の探検の進捗に当って、西地中海の覇者ジェノヴァの商人のイニシアティブが強く働いており、(Heyd, W., Geschichte der Levant Handels) 更に彼等は後ポルトガル及びスペインの重商主義の重要な一環になったのであるが、このジェノヴァが、ゾーフエキングの指示するところによれば、既に或程度真に近代的な工業の発達を遂げつゝあった事など一つの考慮さるべき史実である。(Sieveking, H., Genueser Finanzwesen mit besonderer Berücksichtigung der Casa di S. Giorgio)」(大塚, 前掲著, 3—4頁)

(3) 斯くては、重商主義の理念が例え“貨幣増加説”スミスの所謂「富は貨幣であり、又は金銀である」、即ち“貨幣即富”(註)であつたとしても、それ自体なんら奇妙でも「俗論」でもない。尠くとも“富即支配”——「外国貿易は富を生み、富は権力を生む、権力は吾々の貿易と宗教とを保存する」(チャイルド)——であるから。「重商主義は単なる国富の増大を意図したものでなく、イギリスの他国民に対する力の優越を獲得せしめ、或は主張せしめるために、国富の増大を企図した。」(カニングム)「金! それはコルベールにとって『国家の権勢と拡大と充溢』とを意味していた。」(クラインベルク)「蓄積せよ、蓄積せよ! これがモーゼの言葉であり、予言者達の言葉である。……蓄積のための蓄積(Akkumulation um der Akkumulation)……」(Marx, Das Kapital, S.624, 訳1327頁)

(註) 斯かる富の要素を、メンタルに書き直せばこうである。「私的帝国を、又必ずしも必然的ではないが多くの場合に自己の王朝を建立せんとする夢想と意志……或者には『自由』と『人格の基石』、他の者には『勢力範囲』、第三の者には『えらがり』(Snobismus)という風に説き表わされ得る……」「斗争の意欲……成功そのものゝための成功獲得意欲……」「創造の喜び行為そのものゝ喜び……労作、新創造そのものに対する歡喜……」(Schumpeter, Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung, SS.138—9, 訳230—2頁)

『益々多くを』(plus ultra)——彼等の動機乃至行為に、それ以上の余計な註索——本源的蓄積……云々……の如ききまり文句を加えること自体、無用であるのみか、むしろ滑稽でさえある。一部の者(マルキスト)の往々試みる如く——本源的蓄積が掠奪(Ausplünderung)に基き、東インド会社が、“生産”に無関係な——その掠奪(掠奪商業、商業)を行った——「実際、掠奪は多くの時、多くの所で、商業資本を確立するために用いられた」——という論法(斯かる論法は想像力の致命的欠陥に因る)によって、その滑稽を救うことが出来ようか、否! 出来ない。まさにマルクスの言える如く——「掠奪が出来るためには何

か掠奪されるものが、つまり生産がそこになければならない。しかも、掠奪の仕方はそれ自身更に生産の仕方によって規定されている。」(Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, Einleitung) 東インド会社 (=重商主義, 「商業主義」——「看板に偽りあり」) はまさに斯かる掠奪者——captain of industry であった。^(註)——「『重商主義は商人(商業資本)の政策である』といった通例の見解が、いかに不正確なものであるか……。」(大塚, 前掲著, 107頁) まことに、まことに、スミスの言える如く——Nehru の引用がまさしくそうである如く——「重商主義の案出者は生産者、特に商人及び製造業者である。……就中、注意が払われたものは、わが製造業者達の利益であった。」(Smith, op.cit., p.626, 訳433-4頁)

(註) 本稿の言わんとしていることはこうである。東インド会社自体が文字通りアン・ジッヒに“ブルジョア”であったと。例えばシュムペーターの「新結合の遂行」(Durchsetzung neuer Kombinationen) なる概念——次の五つの主要の中、後の三つ(最初の二つと不可分離な)に吾々は東インド会社の果たした機能の全てを見ることが出来る。即ち、「新しき……財貨或は品質の財貨の製造」「新しき……生産方法の導入……商品の商業的取扱に於ける新方法を含む」「新販路の開拓……市場の開拓」「原料或は半製品の^{新しき}獲得資源の占拠」「新組織の達成……独占的地位の形成……或る独占の破壊……」(Schumpeter, Entwicklung, SS. 100-1, 訳166-7頁)

(4) 然して斯かる「製造業者達の利益」の具体的発現、その主要なる手段こそ、Nehru の所謂 policy ——「イギリスにおけるインド綿製品の輸入禁止、イギリス綿製品のインドへの無制限輸入、あらゆる生産物についてのその様な政策」(村上, 前掲著)——であった。「貿易差額説」として穏かに——スミスに拠って換言すれば、こうである、「輸出の奨励と、輸入の防止とは、重商主義が、それによって、各国を富まんとする二大機構である。……貿易上の収支(balance)を有利にすることによって、その国を富まそうとするのである。」(Smith, op. cit., p.607, 訳397頁) スミスのみならず、この連関、謂わば肝心要を看過した貿易差額説批判一般が肯じ得ないこと勿論である。——「重商主義が、単に、商業資本のイデオロギー、商業資本の利益のための政策であるとすれば、重商主義の輸入制限、輸出奨励政策は理解できない。」(堀江英一・河野健二, 重商主義におけるトーマス・マンの地位, 訳書「トーマン・マン重商主義論」所収, 昭和17年)

(5) イギリス、又はイギリス東インド会社の policy たる“重商主義政策”が、単なる(表面的な)流通(=商業)政策——商業政策又は貿易政策(国際商業政策)でなく、その実、生産政策(投資政策)をも包含する一般的経済政策(広義の生産政策)であったこと、従って重商主義政策を研究するに、それを「貿易政策の課題」としてのみ理解する通例の如き——「貿易(外国商業乃至国際商業)の分野に限ってその政策の在り方を研究する傾向」(藤井茂, 経済発展と貿易政策, 昭和33年, 21頁)は無意味、無効であること——最早明確であろう。スミスの「商業主義」乃至「重商主義」mercantile system なる命名自体、極めて不適當であった。——「誤って重商主義 Merkantilssystem と呼ばれた重工主義 Industriesystem」(リスト)

(6) イギリス、又はイギリス東インド会社の policy が、その変更を余儀なくされたのは、隠当にいつて、イギリス国内の経済事情の変化——「イギリスにおける工業技術の発展」、市場問題、……等——に基くこと、しかも、斯かるイギリスの国内事情が、英・印両国間の貿易又は policy を介在することによって、インド国内にその作用、反作用を及ぼしたこと——は、Nehru, Varshney 両者の何れもが認めるところである。——「貿易現象或は貿易政策は、国民経済に基礎をもち、国民経済の対外経済交通の一部として理解せられるのみならず、それは国民経済構造——構造決定因に基いて質的、量的に決定せられ、又国民経済構造の変動に応じて変動する。反面、貿易を通じて国民経済は他の国民経済乃至国際経済（世界経済）に連結せられ、国際経済的な制約を受ける。——貿易現象、貿易政策の二面的性格。即ち『経済……の諸条件の有機的全体関聯としての『構造』Struktur』（拙稿、経済学の方法 その一、六甲台論集、第7巻 第1号、昭和35年）——『構造』概念の工夫の上に）「各国の経済行為の効果は他の諸国に leak out してゆき、外国の経済政策や経済情勢の影響は国内に leak in してくる』（拙稿、輸出成長率を決定する最も重要な原理、経営と経済、第87号、昭和36年。藤井、外国貿易の概念、上田貞次郎博士記念論文集、第二巻、昭和18年）——その良き例証である。

(7) 「然して、その際、……各国におけるその様な『歴史的諸条件』の固有な編成の様式——いかなる歴史的な性格をもつ歴史的諸条件が、いかなる固有な仕方で構造的に編成されていたか——が、それぞれの国民経済内部における……工業の繁栄如何を決定的に条件づけたと見なければならない。今、その様に……初期産業資本の展開を初発において規定した基底的地盤としての歴史的諸条件の有機的編成をば、初期資本主義の『構造』とよぶならば、吾々は、恐らく、一応の帰結を次の様に表現し代えることが出来るであろう。即ち、近世……諸国における……工業発達を、その史実に即して見るならば、〔安手なマルキシズムにおける如く——〕何らか個々の物質的生産諸条件——素材的条件であれ、又経営的条件であれ——の単なる機械的総和に比例し、且つそうした個々の物質的生産諸力の単なる機械的総和に牽引されて、恰も打出の小槌からでも振り出される様に、……〔産業資本の〕発達が押し進められるというような卑俗な唯物論的見解とはまさに逆に、近世……諸国のそれぞれに固有な初期資本主義の個性的『構造』の示す特殊性が、或る場合には……イギリスにみる様に……産業資本の発達を許容、或は促進し、或る場合には……〔インド〕にみる様にそれを阻止することによって、むしろそうした構造的特殊性の結果として叙上の様な……工業の生産力拡充における 各国間の優劣を惹き起したと解すべきである」と。（大塚、前掲著、157—8頁）

(8) 英・印間の重商主義「政策」の反省に際しては、殊に、「一国の問題が国際的関聯をもち、一国のみでは解決し難いこと」（藤井、経済発展と貿易政策、22頁）の感が深い。

「近世」経済思想上、最初の体系的著書——スミス『国富論』が、貿易問題にその大部を割いた所似である。——「貿易政策及び貿易理論が、国内経済政策や理論に比して、早く

より関心をひき重要性を認められたのは、貿易現象が一国の意志の及ぶ範囲以外にまたがり、その効果を確保するためには、一国の意志のみでは足りないため、貿易の発展については特に周到な顧慮を必要としたという理由の外に、貿易を通じて、国民経済は国際経済に連結せられ、国際経済的な制約を受けるという事情があるからである。」(藤井, 前掲著, 3頁) 本稿が「世界貿易(世界経済)という一般形態の一特殊化としてのインド貿易(インド経済)の把握」を目指す所似の一半でもあり得る。然して「一国のみでは解決し難いことが明白になればなる程、一国政策としての貿易政策が国際性を加えることとなり、国際的場面における問題の解決への寄与という形において、国際的考慮が加重せざるを得ないのである。」(藤井, 前掲著, 22頁)

(9) しかも、Nehru の叙述内容にも窺われる如く、斯かる一現象についてさえ、一部門学科の範疇内では解明し難きこと——「一つの理論のみによって……現象の全様相や機能を把握することは困難」(藤井, 前掲著, 63頁)であること——を示唆する。然して、これは英・印間の貿易、或は重商主義論のみの課題というより、むしろ貿易論、貿易政策論一般の(方法論の)課題——更には、「経済学の方法」、社会科学一般……哲学(世界観)……の課題へと止まることを知らず発展し得るのである。

(10) 然して善かれ悪しかれ如上の如き性格の重商主義(政策)そのもの——イギリス「初期」資本主義そのものゝ推進的役割を演じた中心的人物こそ、「傑出した実業家」であり東インド会社の委員会の一員であった——マン(Mun, Thomas)その人であった。マンの所謂“Foreign Trade is the Rule of our Treasure”なる信条は、そのTreasureが「掠奪、奴隷化、及び強盗殺人によって獲得された財宝」であったか否とを問わず、英・印貿易において見事実証せられたのである。

Ⅲ

以上が、本稿の基本的見解(予備的仮説)——俗説又は通説と根本的に異なる——の主なる若干である。

しからは、「歴史的諸条件」中、いかなる意義において、マン、乃至マンの重商主義論は斯かる(歴史的)役割を果し得たか、「独占資本」イギリス東インド会社のもつ(歴史的)地位は、いかなるものであり得たか、本稿の基本的見解に関わらせての、それらのより詳細、適確なる証明——一つの試みとしての——こそは、本稿のテーマ「イギリス東インド会社とマンの重商主義学説」に与えられた主要課題であるといえ得よう。

〔未完〕